

裁許絵図の基礎的研究

——専修大学図書館蔵『石井良助文庫』から——

上 原 秀 明

キーワード：裁許裏書絵図，石井良助，評定所役人，裁許線，境塚，地境論，入会野，御林，測量技術，絵師

目 次

序

I 調査記録編

- 1 調査対象絵図について
- 2 対象絵図の図版
- 3 裁許絵図調査記録

II 解説編

III 裁許裏書絵図小史

序

石井良助氏の蔵書の専修大学への移管については、平成8年に刊行されている『石井良助文庫目録—文書編—』（1996）の「あとがき」（当時図書館次長笹沼誠治執筆）の中に触れられている。それによれば、昭和55年2月から昭和62年6月までの計6回に亘って神田図書館に寄託されたことにはじまり、その後、専修大学において逐次、購入または寄贈を受けたとある。目録はこの6回にわたる寄託過程と大学内での保管状況を尊重して、

Ⅱ部6編の構成をとっている。今回、調査を行った絵図群は第Ⅱ部におさめられている。第Ⅱ部は第1編 近世編、第2編 近代編、第3編 史料編に分類されている。絵図類は第3編 史料編の中の64 絵図類として分類されているものである。現在（2006）の保管状況を見ると、絵図本来の折畳み形式の保存でない巻物状態（軸仕立て）であるものも見られることから推測して、いずれかの時期に修復されていたことが予想される。

例 言

- 一 本調査は、平成18年7月27日と8月10日の2日間をかけて専修大学生田キャンパス図書館において実施された原本調査の成果を中心に、その一部をまとめたものである。
- 一 調査は、専修大学教員の上原を中心に、調査協力者である大学院文学研究科修士課程櫻井洋亮および文学部環境地理学専攻学生上原ゼミナール有志（北川祐一郎・稲妻亜紀・千明沙弥佳・大村真美）および筑波大学大学院生双木俊介（本学大学院修士課程修了）のメンバーによって実施された。
- 一 調査成果の整理は、人文地理学特講Ⅰ演習（水 3限目）の授業の中で行った。個々の絵図に関するトレース図の清書は櫻井洋亮が行った。
- 一 調査の指導に関しては、大阪大学総合学術博物館鳴海邦匡氏の協力を得た。

I 調査記録編

1 調査対象絵図について

調査対象の絵図類は、『目録』中の「64 絵図類」に含まれている。この絵図類には、「051-」番と「ソ-」番がつけられている。後者の「ソ-」番は、第Ⅱ部『近代編』に含まれていたものであるが、便宜上これらの絵図類を一括して、第Ⅱ部『史料編』に収めたものであるという。今

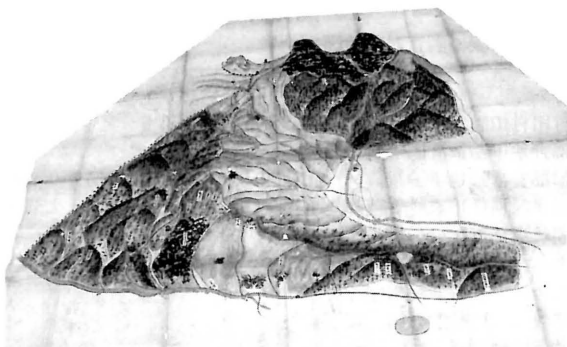
回の調査では、2日間という時間的な事情から、「ソー」番の中から裁許絵図関係7点を選び、調査を実施した。7点は以下のとおりである。

表 調査対象絵図

調査番号	目録番号	絵 図 名
番号1	ソ-022	羽鳥村田村山論裁許図 寛文8.8.28 源右衛門外6
番号2	ソ-026	信太郡野地争論裁許図 貞享3.4.25 仙和泉外4
番号3	ソ-024	河内郡都賀郡野地争論裁許図 元禄12.3.14 久忠左衛門外9
番号4	ソ-027	上総国武射郡住母家村賀茂野地争論裁許図 宝永7.8.4 大大隅
番号5	ソ-020	常陸国信田郡奥津村野場絵図下書 安永4.6 宝蔵院外6 八郎兵衛外1 (訴訟方双方立会ニ付絵図清書願)
番号6	ソ-021	宝蔵院数右衛門論所絵図 安永4.7
番号7	ソ-023	奥津村信太村絵図 年不詳

2 対象絵図の図版

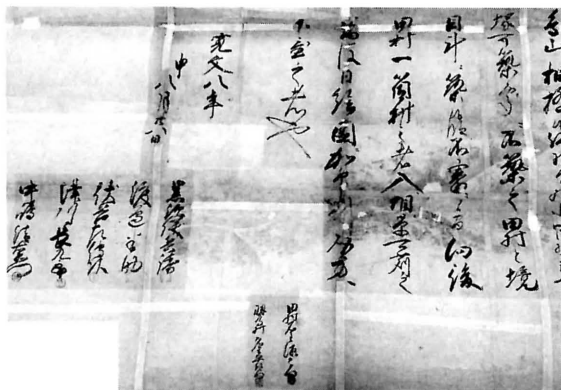
(1) 番号1 羽鳥村田村山論裁許図



① 全体写真

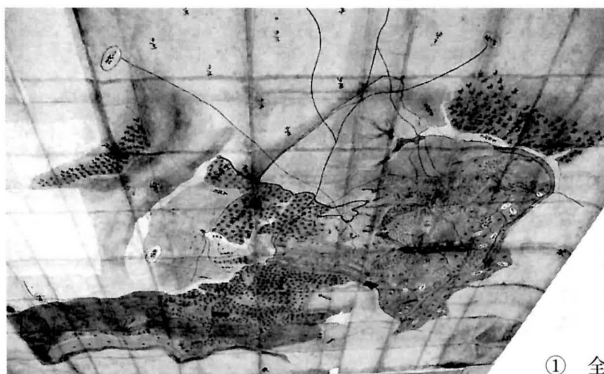


② 裏書 その1



③ 裏書 その2

(2) 番号2 信太郡野地争論裁許図



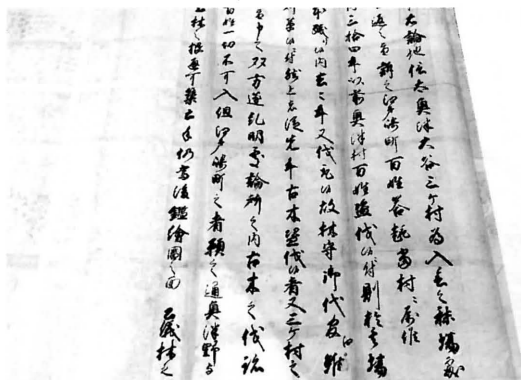
① 全体写真



② 裏書 その1

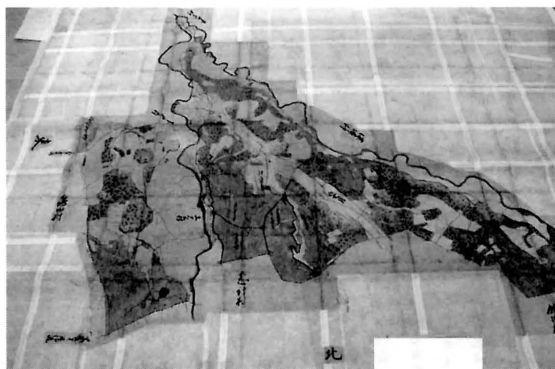


③ 裏書 その2

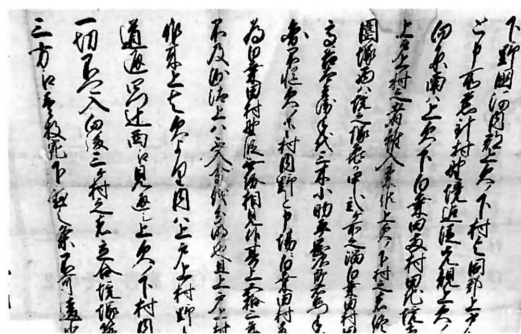


④ 裏書 その3

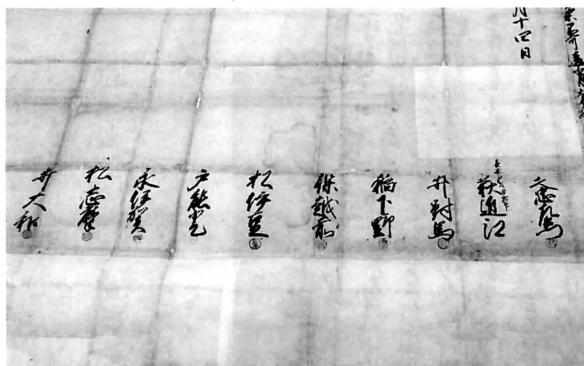
(3) 番号3 河内郡都賀郡野地争論裁許図



① 全体写真

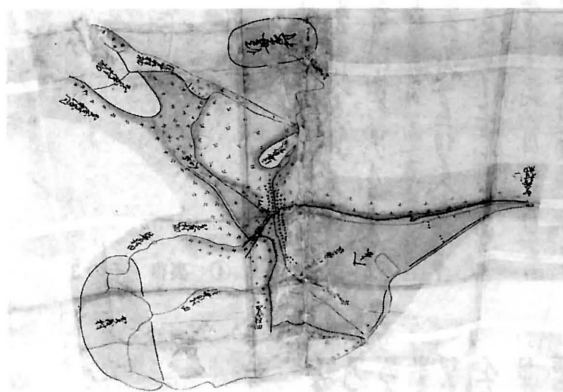


② 裏書 その1



⑥ 裏書 その5

(4) 番号4 上総国武射郡住母家村賀茂野地争論裁許図



① 全体写真



② 裏書 その1

(5) 番号 5 常陸国信田郡奥津村野場絵図下書

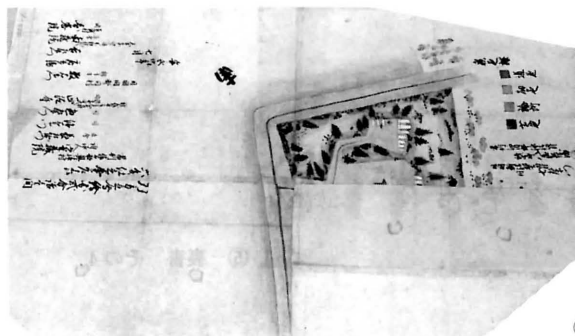


① 全体写真



② 端書

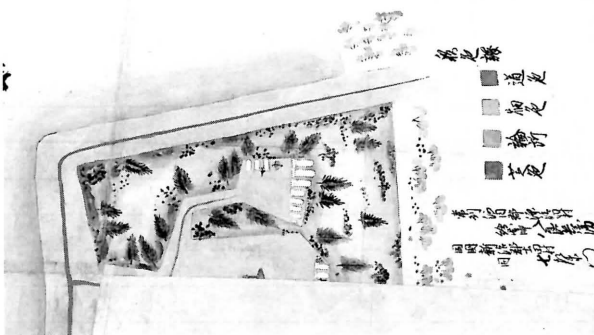
(6) 番号 6 宝蔵院数右衛門論所絵図



① 全体写真



② 端書 その1



③ 端書 その2

(7) 番号7 奥津村信太村絵図



① 全体写真

3 裁許絵図調査記録

例言

- 一 法量は、センチメートル，縦×横の順に表記。
- 一 彩色は，墨線以外の顔料を意味する。■は不明・判読不能箇所を意味する。
- 一 紙面構成と見取図は，「——」は紙の継ぎ目の表面側，「・・・」は裏面側を意味する。

(1) 番号 1 ソー022 羽鳥村田村山論裁許図

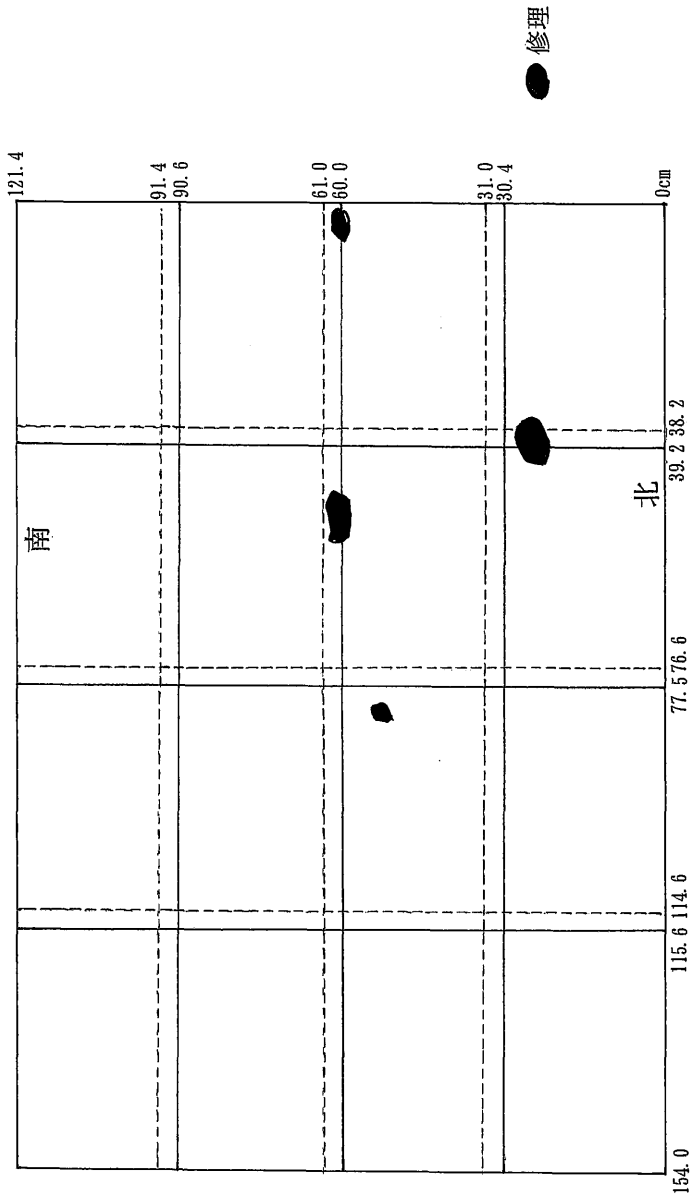
① 調査内容

a 料紙

寸 法	121.4×154.0
枚 数	16
貼 紙	数多くあり（地名）
繕 い	無
表装状況	巻き，裏書有，裏打有
備 考	数箇所破損（見取図参照）

b 図像・彩色

地 形	深山（筑波山など）・赤松林（一般の木山）・水色（土石流地），貼紙（山名：中子峯・長嶺・野山・大文字・湯袋山など）
河川・水路	水色（貼紙：まめご沢など）
道 路	朱色（貼紙：南沢山道・山道・■弥山道）
農 地	
建 造 物	寺社図像と名称（富士・あたご・こくうぞう），寺社図像のみ，木橋図像多し
植 生	群生（松林），赤松（幹〈茶〉・葉〈緑〉），幹葉共墨色など，独立樹（貼紙：五本松），貼紙（林野所屬名：羽鳥田村入会山・田村之山・あたご御立山・箱石御立山・■木立御立山），並木図像（境界木か）
そ の 他	村形（肌色：羽鳥村・黄色：田村），貼紙（とや名：二つとや・たかとや），えぼし岩図像
備 考	構図（北から南を望む），方位（四辺内向），明確な墨筋による裁許線なし，印鑑あり



② 紙面構成と見取図

(2) 番号2 信太郡野地争論裁許図

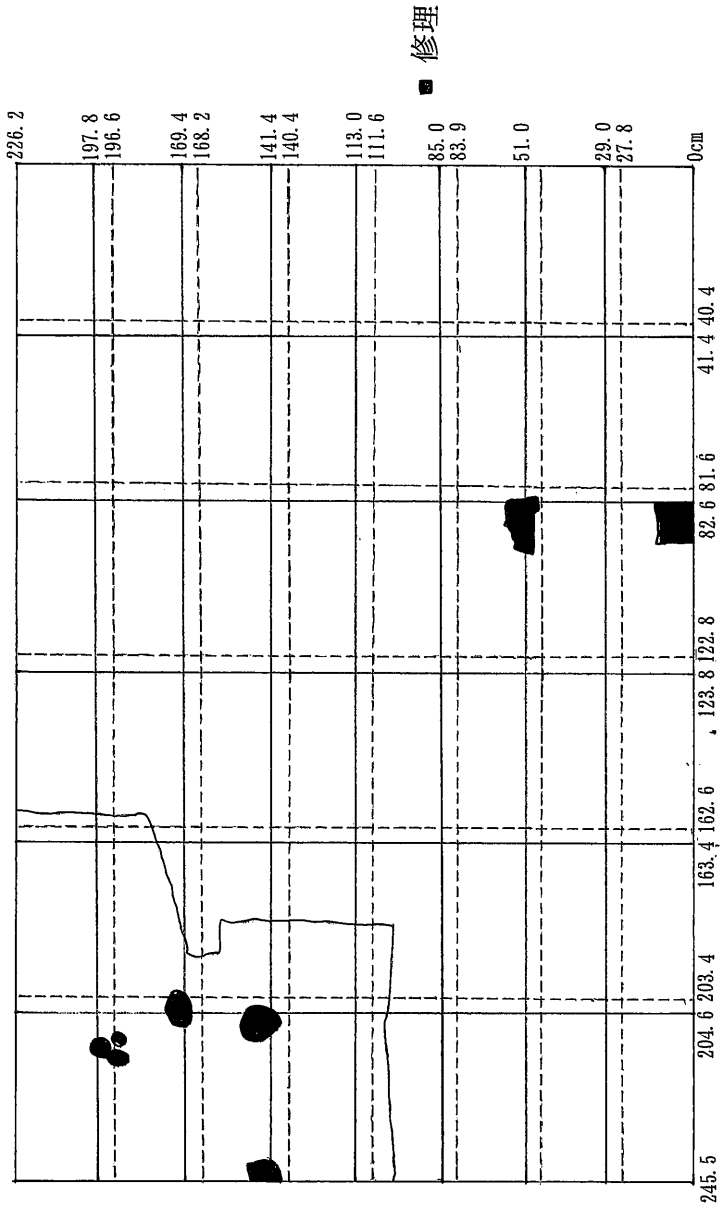
① 調査内容

a 料紙

寸 法	226.2×245.5
枚 数	48
貼 紙	無
繕 い	有（見取図参照）
表装状況	巻き、裏書有、裏打有
備 考	裏面に朱書きで、「■■■三号 明治十八年 東京控訴裁判所判事永井■■■ ■■■ 東京明治十九年二月八日 ■■■裁判所■■■ 水戸■■■裁判所支所司書土 浦支庁判事補・・・」とあり

b 図像・彩色

地 形	墨二重線（崖）、黄色線（林野区別）、江戸崎町周囲の山名（城山・大倉山・愛宕山・天神山・管天寺山・大日山・不動■■■山など）
河川・水路	茶色（水門図像）、水色（池：信太村池・布佐村池、湖・小河川など）、湿地表現（布佐村谷戸部）
道 路	朱色、二重墨線（参道か）
農 地	灰色（永荒田・永荒畑・田・畑・畠）、所属地名（江戸崎田・信太村畑・信太村田・奥津村田・布佐田・犬塚田は谷戸に多い）、永荒田も谷戸に多い、矩形区画（開発地の畑）
建 造 物	木橋図像多数、堰図像（沼田村池）、寺社図像多数（江戸崎町4・信太村4・奥津村2、大谷村2カ所）
植 生	緑色（山林・芝原）、赤松林図像多し、独立樹（城山付近：松杉各1、奥津：一本松）、杉並木（江戸崎神社付近）、林野所属村名（沢田村御林・木原御林・江戸崎御林・御林・江戸崎町林・佐倉村野・犬塚村野など）
そ の 他	村形色（黄色：江戸崎町、白色：奥津村・信太村・大谷村、無地：佐倉村）、境界部に石・塚多数
備 考	構図（四方対置）、墨太線（裁許線）、方位（四辺内向）、印鑑（裁許線上）



② 紙面構成と見取図

(3) 番号3 河内郡都賀郡野地争論裁許図

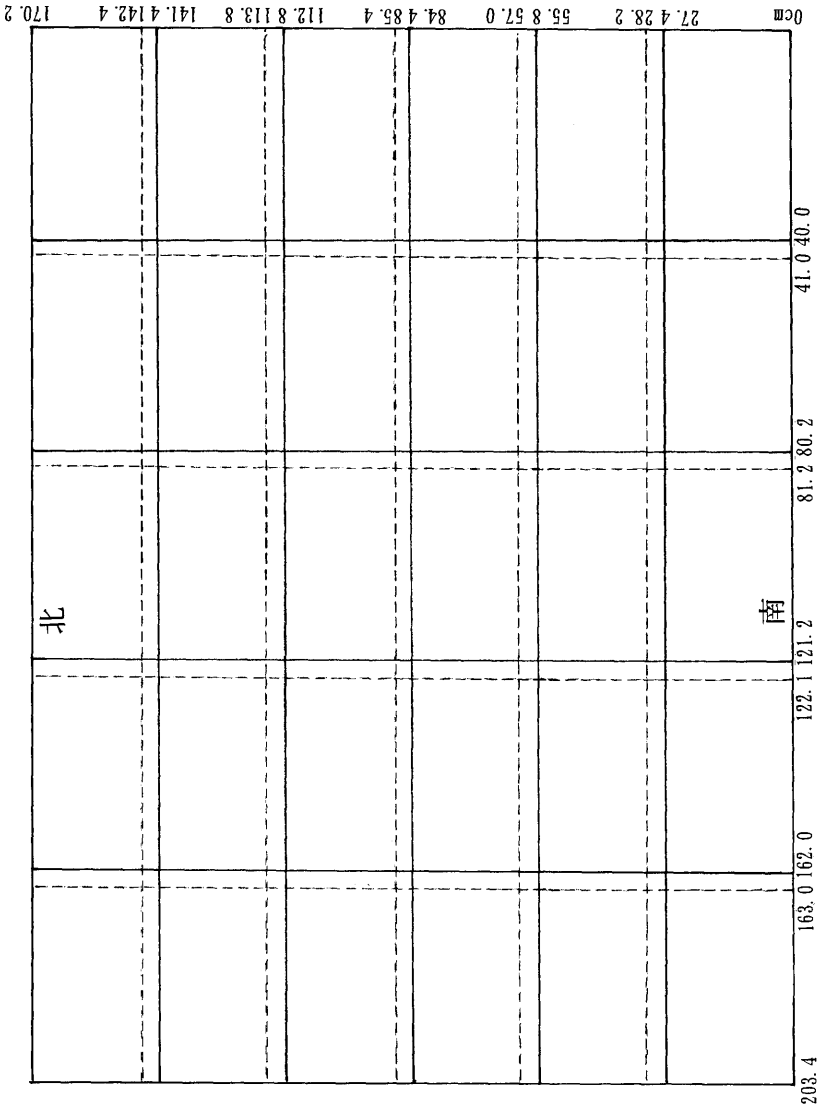
① 調査内容

a 料紙

寸 法	170.2×203.4
枚 数	30
貼 紙	
繕 い	有
表装状況	巻き、裏書有、裏打有
備 考	

b 図像・彩色

地 形	崖表現
河川・水路	水色
道 路	朱線、注記：宇都宮ヨリ鹿沼道2ヵ所・古道・「宇都宮ヨリ粟野道」(貼紙)
農 地	
建 造 物	家屋図像多数、古城、寺社図像多数、橋・碑など
植 生	林野の別、林野所有村名(上下戸上村入会野・上欠ノ下村内野・白桑田村内野・白桑田村野元上戸上村入会・上欠ノ下村野元上戸上村入会)
そ の 他	村形色分(黄色：上戸上村、肌色：上欠ノ下村、薄い肌色：白桑田村、無地：その他村)、地名(上欠下村・下戸上村・上戸上村・飯田村・下戸上村・白桑田村・深津分)
備 考	構図(まちまち)、方位(四辺内向)、墨太線(裁許線)、印鑑(裁許線上)



② 紙面構成と見取図

(4) 番号 4 上総国武射郡住母家村・賀茂野地争論裁許図

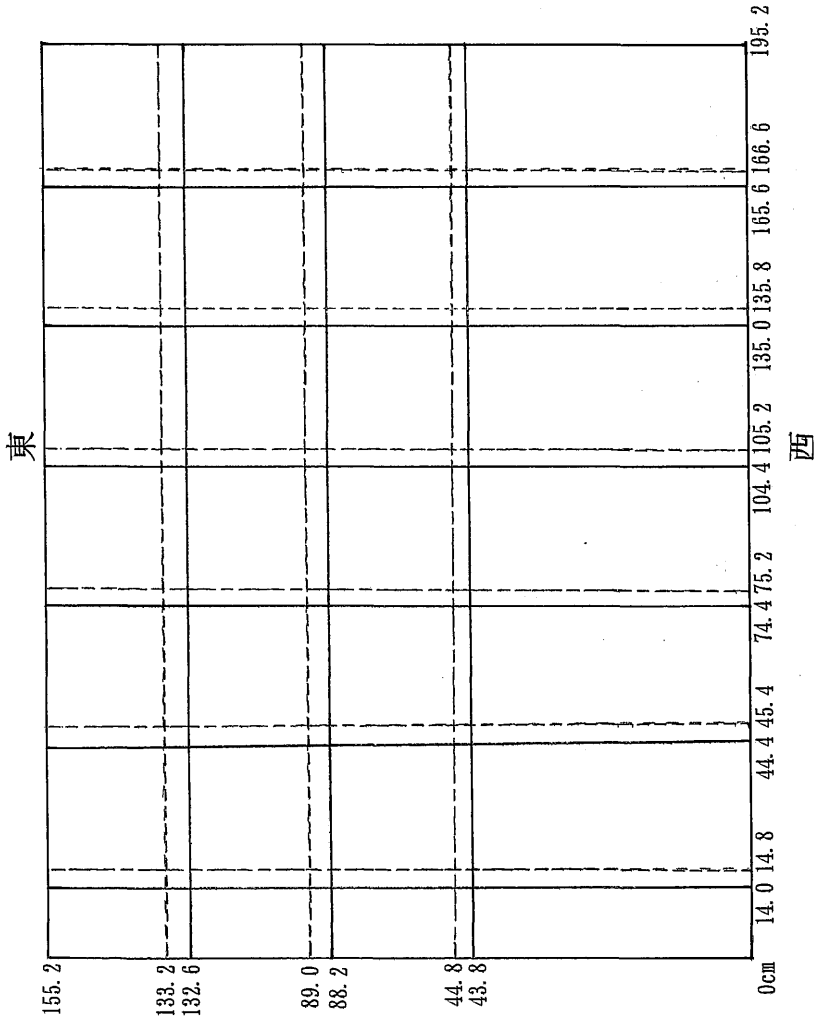
① 調査内容

a 料紙

寸 法	155.2×195.2
枚 数	28
貼 紙	
繕 い	有 (擦れ)
表装状況	巻き, 裏打有, 裏書有
備 考	

b 図像・彩色

地 形	
河川・水路	
道 路	朱線
農 地	薄い肌色, 注記: 住母家村田・住母家村畑・賀茂村田・賀茂村畑
建 造 物	寺社 1 (注記: 賀茂村浅間・鳥居図像), 板橋図像 1
植 生	緑 (野・入会地 2 ヲ所・赤松林)
そ の 他	村形色分 (黄色: 住母家村・賀茂村), 黒点 (塚多数・「住母家村■築候塚」などの注記), 境塚多数
備 考	構図 (四方対置), 方位 (四辺内向), 墨線 (裁許線, ただし印鑑なし)



② 紙面構成と見取図

(5) 番号5 常陸国信田郡奥津村野場絵図下書

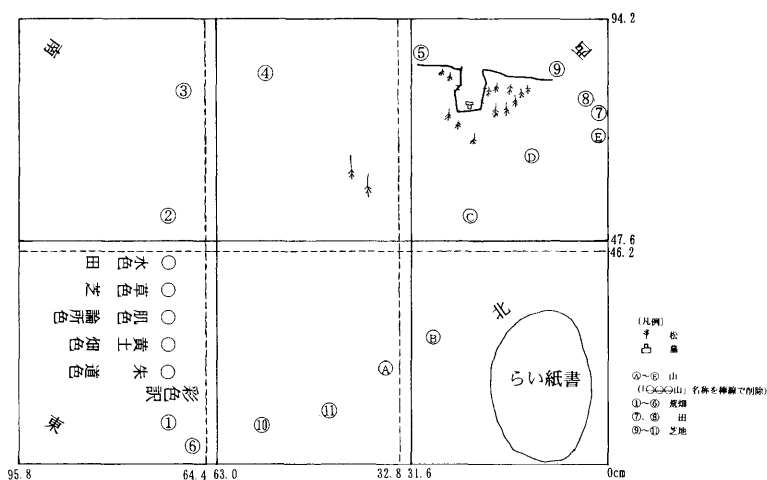
① 調査内容

a 料紙

寸 法	94.2×95.8
枚 数	6
貼 紙	
繕 い	
表装状況	巻き, 端書 (彩色訳など), 裏書 (安永四末年六月)
備 考	

b 図像・彩色

地 形	
河川・水路	
道 路	朱線
農 地	黄土：畑, 水色：田, 荒畑・田・芝地の注記
建 造 物	
植 生	草色：芝, 杉の図像
そ の 他	墓図像, 朱・黒点：測量地点か, 肌色：論所
備 考	構図 (四辺対置), 方位 (四隅内向), 縮尺 (一間三分)



(6) 番号 6 宝蔵院数右衛門論所絵図

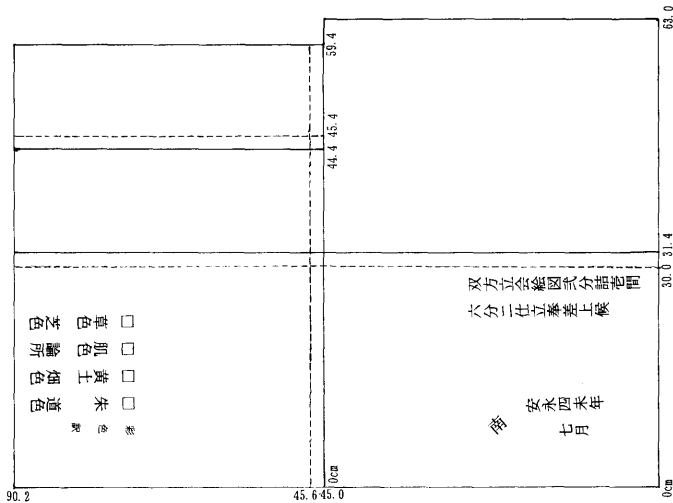
① 調査内容

a 料紙

寸 法	63.0×90.2
枚 数	5
貼 紙	
繕 い	有
表装状況	巻き, 原図の一部欠損, 裏打有, 端書有 (彩色訳・安永四未年七月)
備 考	立会絵図, 絵図師 2 名 (河内郡源清田村・新治郡土田村)

b 図像・彩色

地 形	
河 川	
道 路	朱線
農 地	黄土：畑
建 造 物	
植 生	緑：芝
そ の 他	肌色：論所
備 考	方位 (南のみ), 縮尺 (式分詰一間六分)



② 紙面構成と見取図

(7) 番号7 奥津村信太村絵図

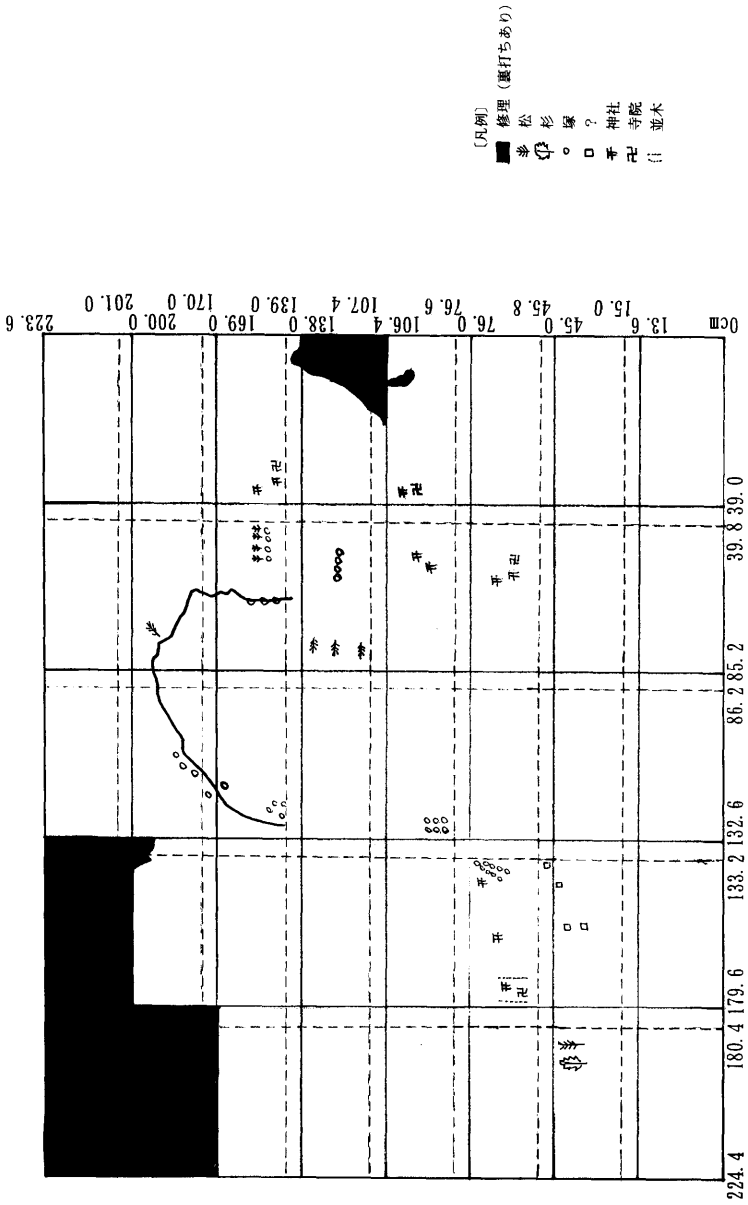
① 調査内容

a 料紙

寸 法	223.6×224.4
枚 数	48 (4ヵ所修理有)
貼 紙	有 (「木葉山御林」・「道成山御林」)
緒 い	破損・修理有
表装状況	巻き, 裏打有
備 考	年不詳

b 図像・彩色

地 形	ソ-026に比べ江戸崎町周辺の山名記載がほとんどない。
河川・水路	水色 (池・湖・河川), ソ-026より池1ヵ所少ない
道 路	朱線
農 地	灰色 (畑・畠・田・芝・荒・佐倉野・布佐野)
建 造 物	寺社図像多数
植 生	緑 (山林・芝), 松林区分 (表現大: 御林, 小: 百姓林か)
そ の 他	村形彩色 (黄色: 江戸崎町, 白色: 信太・大谷・奥津3ヵ村, その他: 無地), 茶 (堰・水門), 境塚多数
備 考	構図 (四方対置), 方位 (四辺内向), 縮尺 (分間壺寸四拾間割), 元紫色 (裁許線, ただし明瞭ではない), 全体の彩色はソ-026よりは濃い

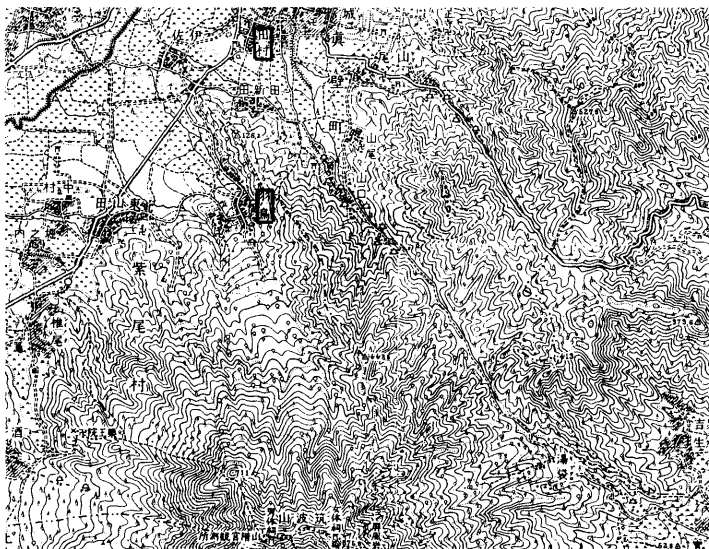


② 紙面構成と見取図

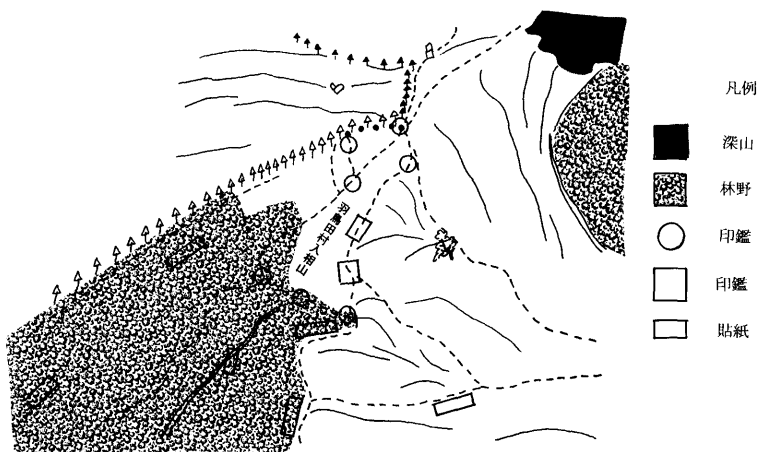
Ⅱ 解説編

1 番号1 羽鳥村田村山論裁許図（茨城県桜川市〈旧真壁町〉）

(1) 描出範囲



① 対応旧版地形図（1：50000 「真壁」 明治40発行）



② 論所部分トレース図（写真1に対応）

(2) 解説

当該地域の南部に位置する筑波山は残丘状に一段と高い標高（877 m）をもって、その山麓には緩斜面が東西南北の4方向に発達している。当該絵図の描出範囲はその北の緩斜面を含む範囲に相当する。羽鳥集落のあるところから筑波山頂へ細長くのびる緩斜面の上方ではかなり深い谷が切り込んでいる。そしてその堆積物は粗大な角礫層で、すべて集中豪雨による山津波で運ばれてきて堆積したものと考えられている。

この緩斜面について、2万5千分1の土地条件図（「真壁」平成1）をみると、山麓堆積地形の土石流段丘と低地の微高地（扇状地）とに細分されている。いずれも同じ成因の地形ということから、土石流の運び出す巨礫によって緩斜面は形成されたと考えられる。この土石流地区は当該絵図の中でも明瞭に区別されている。また、山論が起こった場所は筑波山山頂部に近い木山地区と考えられる（写真1参照）。

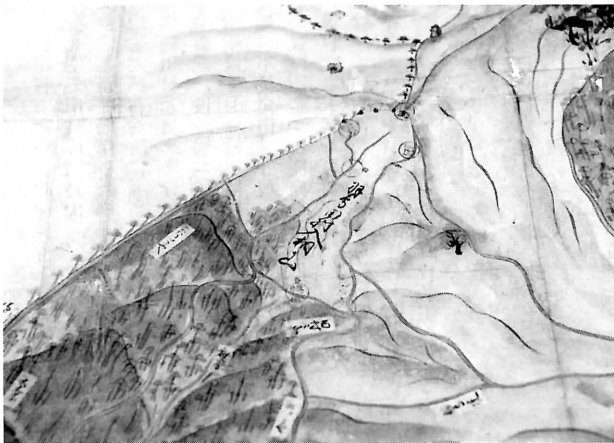


写真1

当該絵図からは貼紙の多さがきわだっている。その貼紙内容は、山・とや・谷・御立山・道・神社・境界線名と多様である。「とや」とは鳥などを捕らえるために、人がこもっている小屋などがある場所にちなむ地名と

考えられる。また、「御立山」とは、一般に私領における領主の管理に属する直轄林をさす。そしてとくにうすい水色で彩色された土石流地区には神社らしき図像や松などの独立樹、岩石が象徴的に描かれている。また、木山地区では、筑波山が霊山を象徴するかのように深山で表現され、そのほかの松林地区とは異なった描かれ方をしている。「田村之山」や争論の場となっている「羽鳥田村入相山」の貼紙もみられ、朱筋の境界線上には裏書に記された人物の印鑑が11ヶ所ほど押されている（トレース図参照）。一般的にみられる太い墨筋の裁許線でないことも注目される。そして山論の当該村落の村形色分は、羽鳥村が肌色、田村が黄色と区別されている。

史料1（裏書）

ソ
ー
0
2
2

今度羽鳥村田村と就山論以絵図
双方申分紀明処田村山羽鳥山
古証文無之候正保四年小幡村
羽鳥村山論之節右論所に羽鳥村
境塚築候処田村が何之申分も
不仕候令訴訟之段不届二候間羽
鳥山二相極候併羽鳥村小幡村論所二
塚可築処二不築之田村と境
目斗二築候段不審二候間向後
田村一箇村之者入相草可却之
為後日絵図ニ加印判双方へ
下置之者也

寛文八年
申八月廿八日

田村名主 源右エ門 印
羽鳥村名主 平左エ門 印

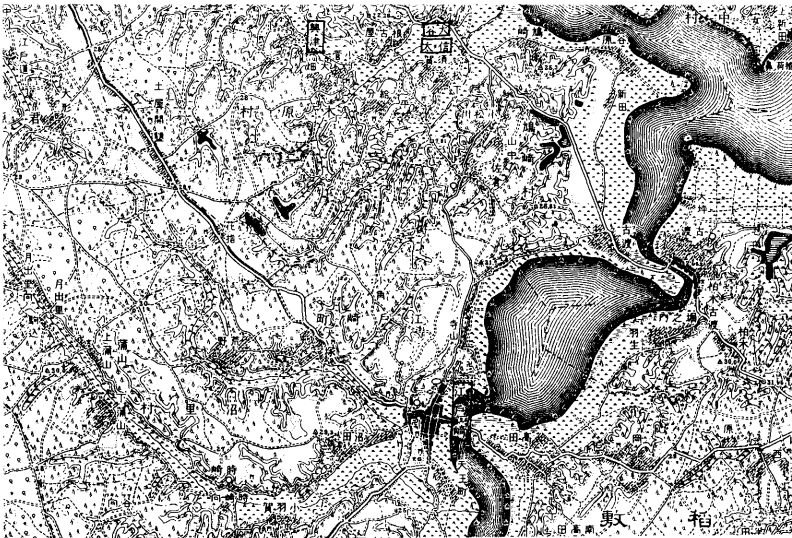
黒沢儀兵衛 印
渡辺半助 印
伏谷左伝次 印
津川長九郎 印
中嶋清石衛門 印

裏書は、寛文8（1668）年8月の裁許状である。羽鳥村と田村両村の山論について、絵図でもって双方の言分を問いただした結果、まず、田村山と羽鳥山についての古い証文がないこと。そして正保4（1647）年に、東

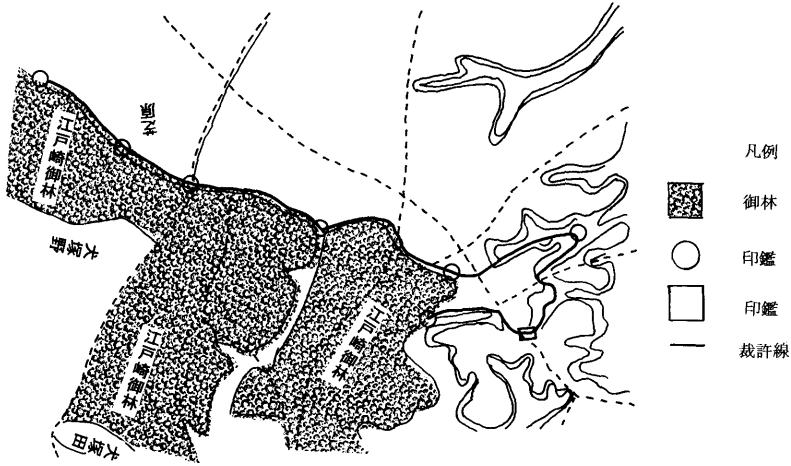
南隣する小幡村と羽鳥村との間に山論が起こった折に、論所地に境塚を築いた時には、田村からは何も言分がなかったのに、今回訴訟を起こすことは不届きであること。したがって羽鳥山と決定づけた。しかし本来、羽鳥村は小幡村との論所地に塚を築くべきであるのに、田村との境ばかりに築いたことについては疑問である。そこで、その場所に、今後、田村1カ村の者が入会って草を刈ることができる、というような裁定が下されたのである。

2 番号2 信太郡野地争論裁許図（茨城県美浦村）

(1) 描出範囲



① 対応旧版地形図（1：50000 「高浜」・「佐原」 明治39発行）



② 論所部分トレース図（写真2に対応）

(2) 解説

当該地域に当たる筑波稲敷台地は鬼怒川低地面から利根川の南に広がる下総台地をあわせた常総台地の北半分を占める。台地は大小の谷や湖沼によって分割されており、郡名に由来して名づけられたいくつかの台地に細分される。当該地域は新沼台地と筑波稲敷台地が北西から南東方向に長く横たえたその一部に位置している。

2万5千分1土地条件図（「佐原」昭和53）によれば、対象地域は霞ヶ浦に面する台地と低地の谷底平野・氾濫平野である谷戸が複雑に織り成す常総台地特有の微地形を示している。また、地形の改変が著しく、山論の舞台付近には、昭和53年に、中央競馬の関東地区での競走馬の調教を行う美浦トレーニングセンターが開場している。

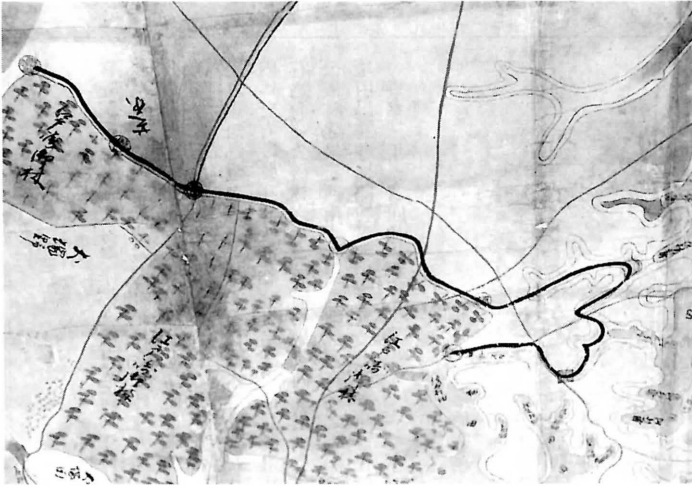


写真 2

写真 2 にみられるように太い墨筋で裁許線が引かれ、8名の評定所役人の印鑑が捺印されている。また争論の当該村落については、江戸崎町は黄色で、3カ村（奥津村・信太村・大谷村）は白色で、そしてその他の村は無地の村形で表現されている。また、後述する「ソ-023」の絵図と比べると、江戸崎町を取り囲む山稜部分（松林）の地名が数多く記されている。林野部分はその所有がわかる形で、「〇〇村御林」と記され、「江戸崎町御林」が多い。このほかに神社とセットの並木表現や、一段と大きく描かれた独立樹もみられる。田畑は村の所属がわかるように、谷戸部分には「〇〇村畑」や「同田」と記される。畑・田・荒畑・永荒田などの注記も多くみられ、特に畑については林野地区内に新開発地を示すかのごとく、矩形区画で表現されている。

ソ 1026

常陸国信太郡信太村奥津村大谷村与同郡江戸崎町争論之事右論地信太奥津大谷三ヶ村為入会之秣場処江戸崎之者取鎌奪荷鞍刺奥津村之百姓壹人擲置尔不返之旨訴之江戸崎町百姓答趣当村二属候

公儀御林之内此所源次太山与申地二而古来太木九本有之内三拾四年以前奥津村百姓盜伐候二付則於其場獄門二掛り其死骸埋候塚於尔今有之其後度々盜伐漸三本残り候内去々年又伐取候故林守御代官江雖

達之難知処至去年三ヶ村之者右御林之地を入会野与申掠苅草候二付然上者從先年古木盜伐候者三ヶ村之内二可有段難斗候故百姓一人為証抛江戸崎町江召連指置旨申之双方遂糺明処論所之内古木伐跡

有之而 公儀林之地二無紛相見条向後信太奥津大谷三ヶ村百姓一切不可入但江戸崎町之者願之通奥津村与公儀林之境自西南之端至論地之廻迄林之外隔壹間堀溝以其土林之根通可築土手 為後鑑繪図之面仍公儀林之境引墨筋各加印判双方江下置条永可守此旨者也

貞享三年丙寅四月廿五日

仙和泉 [㊤]	(勘定奉行)	仙石 政勝
彦伯耆 [㊤]	(同)	彦坂 重治
大備前 [㊤]	(同)	大岡 重清
北安房 [㊤]	(町奉行)	北条 氏平
甲斐飛騨[印]	(同)	甲斐庄正親
本淡路 [㊤]	(寺社奉行)	本多 忠周
坂内記 [㊤]	(同)	坂本 重治
大安芸 [㊤]	(同)	大久保忠増

次に裏書をみてみよう。貞享3（1686）年4月の年期が入った裏書で、信太村奥津村大谷村と江戸崎町との争論である。前述したように当該村落の3カ村と江戸崎町の村形色が、それぞれ白色と黄色とに区別されている。ここで訴訟の経過とその裁許結果をおってみよう。

3カ村訴状：論地は3カ村の入会の秣場であるが、江戸崎町の者が鎌と馬の荷鞍をも奪い取り、さらには奥津村百姓1人を捕縛し返還しない件について訴え出た。

江戸崎町百姓の返答書：論所は当村（江戸崎）に属している御林内の源次太山という所に古木の大木9本があつて、34年前に奥津村百姓がひそかに刈り取り、規則によってその場でさらし首になり、その死骸を埋めた塚がある。その後たびたびひそかに刈取られ、ようやく3本残ったのであるが、一昨年また刈取られたので、林守代官にこの件を知らせたが、わからないままである。去年、3カ村の者がこの御林地を入会野と申し立てて刈草を採った経緯があるので、以前から古木をひそかに刈取った者が3カ村の中にいるかもしれないので、百姓1人を証拠のために江戸崎町に召し連れてそのままにしておいているのである。（なお御林とは、幕府勘定奉行の所管または、御林奉行の支配に属し、公儀林とも呼ばれ、そこでの犯罪は死罪または獄門の厳科に処するのを普通としていた。）

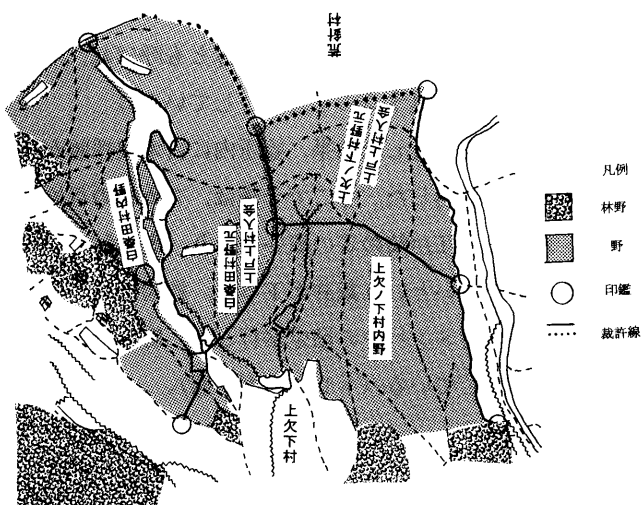
裁許結果：両者の主張を追及した結果、論所内に古木伐採跡があるので、御林の地であることが判明した。そこで今後は、3カ村の百姓は一切入ってはいけない。ただし、江戸崎の者の願いどおり、奥津村と御林の境に溝を掘って土手を築きなさいという裁許が下った。絵図面に公儀御林の境界線を墨線で引いて評定所メンバーの勘定奉行3名、町奉行2名、寺社奉行3名の計8名が捺印をしている（トレース図参照）。

3 番号3 河内郡都賀郡野地争論裁許図（栃木県宇都宮市と鹿沼市との境界部分）

(1) 描出範囲



① 対応旧版地形図（1：50000 「宇都宮」 明治42発行）



② 論所部分トレース図（写真3に対応）

(2) 解説

この地域には段丘が広く発達し、宝積寺・宝木・田原面という段丘面編年が組み立てられ、これらはいずれも南北に細長く分布するが、同時代に形成されたと見られる段丘面がより新しい段丘や現在の沖積低地により分断されているため、複雑な分布を示す。

2万5千分1の土地条件図（「宇都宮」平成7）によれば、当該地域は宇都宮西部台地と鹿沼台地の間に挟まれた姿川の形成した南北に細長い谷底平野を含む地域である。

写真3からもわかるが、比較的平坦な丘陵地に太い墨筋の裁許線が引かれているのと、評定所役人の捺印が特徴的である。捺印は10名中9名の捺印を確認できる（1人長崎出張中）。論地には「上欠ノ下村内野」・「上欠ノ下村野元上戸上村入会」・「白桑田村内野」・「白桑田村野元上戸上村入会」と記されている。ここでの「内野」は、一村が占有し、その村落民が共同的に使用収益する「村中入会」の村野で、他村の入会は原則的に許されない林野である。また村形色分では、上戸上村のみが黄色で、白桑田村



写真3

ソ 1024

下野国河内郡上欠ノ下村と同郡上戸上村都賀郡白桑田村秣場論之事上欠ノ下村之者申趣亀カ甲原之儀亀塚
と申所荒針村野境迄従先規上欠ノ下村地内ニ而上戸上村白桑田村入会秣刈来候由訴之白桑田村之者答候ハ町田
向原南ハ上欠ノ下村白桑田阿村田地境東ハ亀塚之沢西之岸北ハ荒針村境塚加禄の年ヨ里飯田村境迄前々白桑田村野ニ候故
上戸上村之者訴人来候上欠ノ下村之者終ニ入会候儀無之由申之上戸上村之者申候ハ西之台亀カ甲原之儀上戸上村惣左衛門畑ノ見上之
開塚西ハ境之塚亀カ甲式ヶ所之溜白桑田村田地境欠ノ下上戸上阿村境ニ而欠ノ下村之者一切不入会之旨申之右訴論不分明ニ付為檢使
高谷太兵衛手代三木小助平岡次郎右衛門手代赤坂助太夫差遣之令檢分処欠ノ下上戸上白桑田三ヶ村之者申立候野境証拠一
円不鑑欠ノ下村内野と申場ニ白桑田村水帳ニ載候式町八反歩余之畑有之欠ノ下村地内ニ候ハバ白桑田村之者ニ可為開謂無之上者
為白桑田村野候無紛相見候其上五拾三年以前戸上村白桑田村野論之節欠ノ下村之者右ノ野江出入会者上戸上村一同可訴出処
不及沙汰上ハ不入会儀分明也且上戸上村上(欠ノ)下村野境之儀姿川を越畑有之先年領主令檢地之上戸上村水帳載之今以
作来上者欠ヨ里内ハ上戸上村野と相見条亀カ甲原ハ上欠ノ下村地内ニ相定上戸上村可入会然共上欠ノ下東方
道通四門辻西へ見通シ上欠ノ下村内野ニ相極畢勿論如前々白桑田村野江上戸上村之者可入会欠ノ下村之者
一切不可入向後三ヶ村之者立合境塚築之於入会野五ニ新發一切不可致之為後証絵図之面野境引墨筋各加印判
三方江老枚宛下置之条不可違背者也
元禄十二年巳卯三月十四日

久忠左衛門⑨

長崎江被遣候ニ付無加印

荻近江

井対馬⑨

稲下野⑨

保越前⑨

松伊豆⑨

戸能登⑨

(勘定奉行 久貝正方) (上記につづく) 永伊賀⑨ (同 永井直敬)

(同 荻原重秀) 松志摩⑨ (同 松平重栄)

(同 井戸良弘) 井大和⑨ (同 井上正岑)

(同 稻生正照) 保田宗郷

(町奉行 松前嘉広)

(同 戸田忠真)

(寺社奉行 戸田忠真)

と上欠ノ下村は肌色、その他は無地である。そして数多くの家屋や寺社図像が見られるのも特徴的である。欠之下村根古屋集落付近の古城跡の輪郭線も興味深い。

次に裏書に注目してみよう。元禄12（1999）年3月に裁許が下った、下野国河内郡上欠ノ下村と同国上戸上村・都賀郡白桑田村3カ村の秣場論である。以下その経緯を述べてみよう。まず、3カ村の主張は、以下の通りである。

上欠ノ下村の主張：亀カ甲原のこと、亀塚というところから、荒針村野境までは前例で上欠ノ下村地内である。その場所に上戸上村と白桑田両村の者が入会と称して秣を刈にきていた件についての訴えである。

白桑田村の主張：町田向原の南は上欠ノ下村と白桑田村の田地を境とする。東は亀塚の沢西岸、北は荒針村境塚、飯田村境迄、以前から白桑田村の野である。

上戸上村の主張：上欠ノ下村の者はいまだかつて入りあう理由がないこと。西之台亀カ甲原については、上戸上村村民何某の畑から見上げて囲塚、西は境塚亀カ甲原2カ所の溜（溜池か）白桑田田地境、欠ノ下村と上戸上両村境であって、欠ノ下村の者は一切入りあわない。

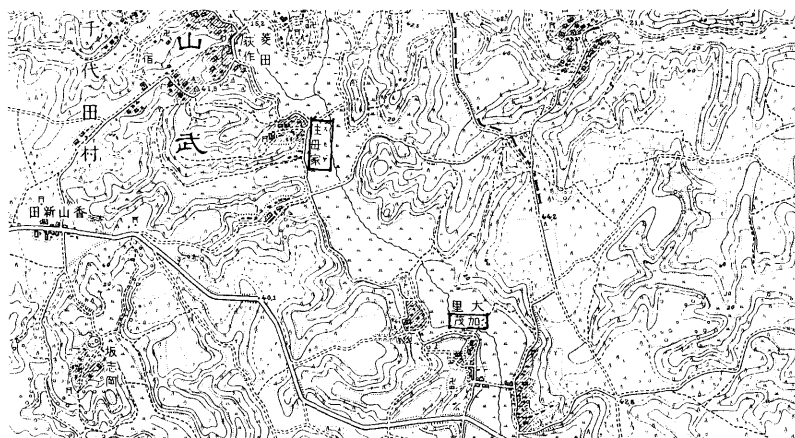
そこで、3者の主張が不分明なので検使として2名の代官手代をやって検分を行った結果、3者の主張する野境の確証がないこと。そして「欠ノ下村内野」と主張する場所については、白桑田村水帳に記載されている畑が存在する。もし欠ノ下村地内であるならば白桑田村の者が開発するはずもない。したがって「白桑田村野」であることに相違ないとみえる。53年以前に戸上村と白桑田村とが野論を起こした折に、欠ノ下村の者がこの野に入りあっていたとするならば、上戸上村一同で訴え出るところであるが訴訟に及ばなかったのは、入りあっていなかったことは明らかである。さらに戸上村と上欠ノ下村野境は姿川を越えて畑が存在する。以前に領主が

検地を行って上戸上村水帳に記載し、現在まで耕作してきている。したがって「上戸上村野」とみえる。以上の根拠から、

裁許結果は、亀カ甲原は「上欠ノ下村地内」と定め、上戸上村は入りあうことが出来る。しかし上欠ノ下村東方の道通し四つ角辻から西を見通して、「上欠ノ下村内野」に決める。勿論、これまでのように白桑田村野に上戸上村の者が入りあってもよいが、欠ノ下村の者は一切はいつてはいけない。そして今後は3カ村の者が立ち会って境塚を築き、入会野は相互に新たな開発は一切行ってはならないという裁定が下されたのである。当該絵図はこの裁許文と合致した表現となっている。最後に、絵図面に野境を墨筋で引いて、評定所構成メンバーの勘定奉行4名、町奉行2名、そして寺社奉行4名、計10中の9名が捺印している。また、当該絵図には元禄国絵図作製事業の中心人物井上正岑の名もみえることは大変興味深い（トレース図参照）。

4 番号4 上総国武射郡住母家村賀茂野地争論裁許図（千葉県芝山町）

(1) 描出範囲



① 対応迅速図（1：20000 「多古」 明治39発行）

(2) 解説

当該地域は下総台地の一部に位置する。この台地を刻む広い谷底をもつ谷筋の各所には貝塚が分布していることから、埋積谷であり水田として利用され、台地周縁の急崖は海食崖であると解されている。台地面は第二次世界大戦前には、陸軍演習場・御料牧場として利用され、戦後農地・住宅地に転用され、三里塚付近には新東京国際空港の通称成田空港が建設されている。

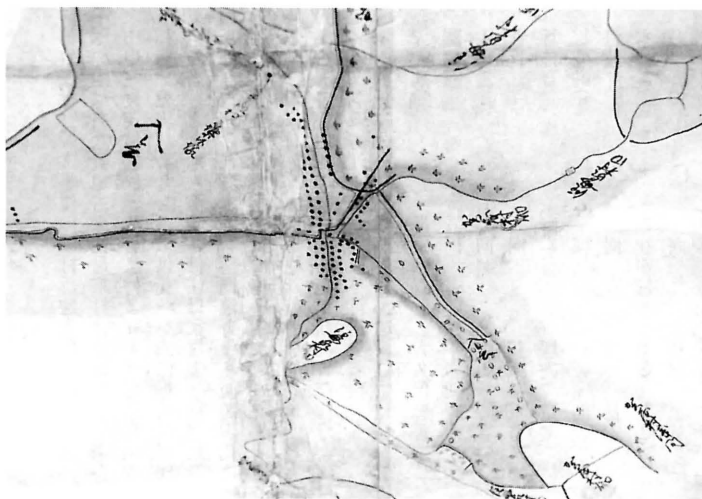


写真4

2万5千分1の土地条件図（「成田」昭和53）によれば、当該地域は下総台地に位置する台地がやや平坦化した部分に集落が立地し、低地の谷底平野が谷津田となる複雑な地形を織り成している。

写真4からもわかるように、山論箇所の概要を示す粗略な絵図で、裁許線らしき墨筋はあるが、裁許線上に評定所役人の捺印は見られない。田畑の帰属が注記されているが、これを見ると両村の耕地が錯綜している状況が見てとれる。また、論地とおぼしき箇所には、おびただしい数の境塚が記されている。村形も住母家村と賀茂村とが黄色で彩色されている。

宝永七年庚寅閏八月四日

大久保	大久保忠香	勘定奉行	大久保
中出雲	平岩親庸	同	中出雲
荻原	時春	同	荻原
坪内	重秀	同	坪内
松野	定鑑	町奉行	松野
丹羽	助義	同	丹羽
本多	長守	同	本多
鳥居	忠晴	寺社奉行	鳥居
安藤	忠英	同	安藤
安石京	重行	同	安石京

住母家村の主張：野地である大作台に供養塚を築いたところ、賀茂村の者がこれを壊した。ここ大作台は昔から住母家村の持分であるので、塚を築いてきた経緯があり古い塚がたくさんあるので賀茂村の土地ではないと申し上げた。これに対して、

賀茂村の主張：大作台は五通野という賀茂村の持分である。そして毎年、秣を取ってきている。賀茂村でも昔から供養塚を築いているが、秣場が狭くなってきているので、元和頃からは塚を築いてこなかった。当村の野地であることは紛れもないので、新塚を壊したのである。

そこで、論所であるので、検使として代官手代を派遣して詳しく調べたところ、両者の言分が全くはっきりしない。そこで供養塚を調べたところ、論所では賀茂村からは数十年間塚を築いていない。4年以前には住母家村から築いた塚を一カ所壊し、一カ所は新規のものとして証拠が残っている。賀茂村の言分ははっきりしない、という検分結果であった。

結論として、論地は住母家村地元とすべきであること、そして今後は両村の入会地と定める裁定が下された。裏書には評定所メンバーの勘定奉行4名、町奉行3名、寺社奉行4名、計11名の連署捺印がある。

5 番号5 常陸国信田郡奥津村野場絵図下書

(1) 描出範囲

前出2 番号2 (1) 描出範囲を参照のこと。

(2) 解説 (図版番号5 ②端書参照)

絵図師2名に対して出された文書である。争論地の野場について、立会って検地を行った結果、測量に間違いがないので縮尺壱間三分で清書するように絵図師に対して差し出された文書である。絵図の端書には(安永四)未(1775)年六月とある。また、彩色訳があり、道(朱筋)・畑(黄色)・田(水色)・芝(草色)、そして論所は(肌色)であることがわかる。また、墓地やその周囲を測量したと思われる測量ポイントらしき朱点や黒点が記されている。絵図師は、奥津村の南部に位置している河内郡源清田村八良兵衛と北部に位置する新治郡土田村七左衛門の2名である(史料5)。

(2) 解説

「ソー026」の絵図とほとんど同じ描写内容であるといってもよいが、この絵図の方が濃い彩色である。より新しい時期の写と思われる。何の目的で何時の時期に作製されたのかについては不明である。描写内容の特徴として、「道成山御林」と「木葉山御林」の貼紙が見られる。また、裁許線とおぼしき茶筋（元来は紫色か）が記入されているが、前出の「ソー026」の裁許線とは異なっている。江戸崎町周囲の丘陵部の地名注記もほとんどみられない。

Ⅲ 裁許裏書絵図小史

1 はじめに

「裁許絵図」とは、国史大辞典（石井良助執筆）の説明によると、「江戸時代、土地境界に関する訴訟では現地の地図を作らせることが行われた。重要な訴訟では、裁判所より現地に検使を派遣して調査させることもあったが、村境に関する訴訟の場合には、その裁判は幕府より領主・地頭に封与した領分・知行所の内容にも関係するので、幕府の評定所で裁判し、判決で定めた境界線をその絵図に墨書して、境界線上に評定所一座の奉行が捺印した。この絵図を裁許絵図と称した」とある。¹⁾

ここでは、この裁許裏書絵図に関する研究を整理し、これまでに明らかにされている点を確認するとともに、ここでとりあげた絵図の位置づけを行っておきたい。

2 研究小史

1) 法制史・歴史学分野

さて、裁許絵図を正面にすえての研究が開始された歴史は比較的新しく、近年のことである。歴史学や歴史地理学の分野での研究が進められている。

裁許絵図の全体像を扱った研究から見て行こう。歴史学では山本英二による「論所裁許の数量的考察」が注目される²⁾。ここでは「旧幕裁許絵図目録」を分析し、大半の絵図が東日本、とりわけ関東近国に多いことが報告されている。こうした地域的偏りについては、「上方八か国」は江戸の評定所からは相対的に独自の支配機構を形成していたことにあると推定している。

また、絵図が集中している時期は、17世紀後半(1650-1710年)の寛文・延宝から元禄にかけてであり、この期間は元禄の国絵図作成事業に起因する国郡境論を除けば、山林原野・村地境・河川用水論が多いという。この時期に論所裁許絵図が多く残されていることについては、全国各地で発生する山論・水論に対して幕府が積極的に検使を派遣して訴訟を処理したことの証明であるとした。

近世後期(18世紀後半)における裁許について整理を行った杉本史子の研究では、論所決着方式の中に、地境論に際して裁許裏書絵図方式があり、その手順は評定所から老中へ裁許内容について伺いをだしたうえで、裁許裏書絵図を作成して、裁許を行ったことが明らかにされている。

また、前者の研究では17世紀後半という時期や、山林原野・村地境論と裁許絵図の関係について、また、後者では18世紀後半という時期や、地境論と裁許絵図との関係が指摘されている。いずれも地境論と裁許絵図との間に深い関係がみられることがわかる。そこで次にこの土地境界に関する訴訟についての研究を見ていきたい。

地境論については、早くに近世民事訴訟制度の研究のなかで、小早川欣吾が説明を加えている⁴⁾。これによれば、地境論発生時における決定の原則は「仕来」に基づいて事件を落着せしむる事に在ることと、国郡村境論は一般の地境論とは扱いが別であることが示されている。国郡村境に関連する訴訟は当該事件発生地の役所の専管事項でなくて、勘定奉行に照会の上、事件の取扱いの指揮を仰ぐべきものとしている。享保初頭以前より裁

許絵図裏書には老中並びに三奉行の連印を必要とした。大名領相互間の地境論は近世初期より寺社奉行初判評定所公事で、国境郡境に関連あるものは老中加印によって事件の落着をみるのである。また絵図の作成行為は論所における特殊的手段の一つである。絵図には論所絵図と起請文の作成や国絵図の有力な基礎文書、そして詰絵図の判定結果は裁許絵図・裁許裏書絵図となり、その写は双方に下付されたであろうことなどが指摘されている。

地境論では「仕来」の重要性、とりわけ国郡村境論の特殊性、当該絵図作成は特殊の手続きであることや裏書作成プロセスについての概要が指摘されている。

本格的な裁許絵図研究の嚆矢として、近世境界争論時の絵図や絵師について考察した大国正美の研究がある。⁵⁾ここでは境界争論時にかかわる絵図を以下の4つに分類している。①訴状、返答書添付の絵図、②立会絵図、③論所見分絵図、④裁許絵図であって、②以降は公図性を持ったり、公儀の意志が反映される性格をもつことが指摘されている。また、絵図小屋が設置されることが、近世の特徴的な紛争処理の作法であり、両当事者が主張をぶつけ合いながら一つの絵図を作り上げるために共存、協力している特殊な空間であることと、その折の神文起請では論所を正確に絵図にすること、非議をもうしかけないこと、絵師を雇い公平に作成させること、余分な部分を描かないことが明記されている。中世との決定的な違いは、紛争当事者が官使の派遣を受ける前に自力で公図性を備えた絵図を平和裡に作成できたことである。絵師も公平性が要求され紛争の証人、調停役を求められている。領主側の判決・上からの意志が地域の入会慣行の秩序化に果たした役割は相対的に小さいが、絵図をはじめとする証文の蓄積を継承する地域社会システムがそれを大きく補っているという。

ここまでの研究は総論的かつ概説的研究といってよい。近年における裁許絵図や、その関連絵図については、宮原一郎が、精力的に近世前期の関

東を中心に争論絵図の研究を進めている。とくに個別立会絵図と裁許絵図⁶⁾についての詳細な考察では、立会絵図については、紛争当事者の作為を防止する点に目的があるが、作成そのものに困難性が生ずることや、この絵図の裁許絵図化することが言及されている。また絵図には両者が納得できない部分へ付紙することで異なる主張をこの絵図に盛り込むよう評定所から命じられている。吟味過程では、評定所において寺社奉行2、町奉行2、勘定奉行3名が出座し、訴状と返答書が読まれ、双方が絵図の絵解きと口頭での説明が行われた。このように立会絵図の重要な論拠文書としての使用が認められる。また別のケースでは、勘定奉行3名の加判と墨筋を付けた裁許絵図が双方へ2枚下付された。絵図には山野名・点在する田畑・屋敷地・村名・字名・家数が記載されている。この裁許絵図には墨筋に勘定奉行が捺印している。立会絵図と裁許絵図の差異は、後者が良質の料紙（雁皮紙）や顔料を使用していることである。両者は一方を書写されたことがわかる。

裁許絵図の検討では、立会絵図に裁許文を付すことで裁許絵図になる特徴を論じ、特に延宝～元禄にかけて絵図形式の裁許が増加した。村にとって裁許のもつ意味は地域の先例や慣習を文章化した一つの作業であること、在地の意向を追認する形で多くの裁許が下される傾向があるという近世前期幕府裁許の特質を明らかにしている。

また、17世紀前半における絵図も含めた制度的な幕府裁許の性格やその変化を検討した研究では、①検使裁許の時代では絵図ではなくて書下形式を選択していることから、現地で直に裁許を下すために採用された方式ではないかということと、検使の派遣は幕府の都合による場当たり的なものであったことが明らかである。②次に評定所裁許の段階に入ると、立会絵図の作法が完成していく様子がうかがえる。寛文期以降、裁許に至る過程を裁許状に記述することが定着していく。それはどのような理由で村の主張を認め裁許を下したかという経過を検使自身が裁許状の文中に記録とし

で残す必要性を感じたためではないかと推論している。③万治期には老中加判の裁許状に加えて、番方系の加判する裁許状が確認できる。近世前期の争論絵図そのものの特色についてのより具体的かつ詳細な考察や制度的な幕府裁許の性格や変化について研究している。

入会地研究の中でも、こうした類の絵図について部分的に触れられている。船木明夫の研究では、17世紀後半⁷⁾という時期の重要性を指摘している。事例としている下野国茂呂村と周辺村落における17世紀後半の村落間争論と裁許の特質をみると、寛文期に幕府が新しい裁許の方針を伴って立ち現れ、その裁許の方針が定着していったことの意味は大きいものと思われる。ここでの裁許の特質とは、それまでの村落間の境界のみを確定する方針から、境界を村落間入会地の範囲の両方を示す方針に転換しているということである。さらに入会地の中にすでに開発地が存在した場合、開発の主体となった村は検地などを根拠に、該当地への権利を求めているのに対し、裁許もこれを認める方向になるという。

栗原⁸⁾ 亮も常陸南部の入会地紛争について考察した結果、貞享・元禄期には村落間の訴訟があると、幕府は立会絵図の作成を命じ、その作成にあたっては各村が絵師を選定し絵図を作成したことや、その裏面には裁許文が掲載され、その後奉行所の役人が署名し、関係村々に渡された。この裁許絵図は各村の入会地の所在を証明するもので、重要な書類として扱われてきたことが指摘されている。裁許は村落間入会地の範囲を確定することを示す、という解釈をとっている。

2) 歴史地理学分野

歴史地理学の立場からは、研究初期段階には木村東一郎(1962・67・79年)からの言及がある⁹⁾。村絵図という枠組の中での「境界設定村絵図」というくくりで、その特色について簡単な事例紹介を行っている。また、作成者の絵(図)師の性格や測量についての概説的研究であった。

このような研究の初期段階を経て、今日では鳴海国匡が精力的に研究を進めている¹⁰⁾。まず、近世山論絵図の分類についての試論では、以下のよう
に江戸幕府の司法法典関係資料を参考にして、各絵図の表現上の特徴と、
そこでの評議の特色が述べられている。①証拠絵図 これは訴訟方より管
轄奉行へ目安を提出し、訴状の裏書に訴訟の受理や相手方への返答書の作
成、召喚の指示を加え、相手方に渡す（地境論では証拠資料や旧来の慣行
が重視される）。②立会絵図 管轄奉行の指示を受けて争論当事者と絵師
が作成し提出した絵図のことをいい、この絵図をもとに両者の主張が検討
された。村役人と絵師の双方によって不正行為の行わないよう起請文が作
られた（管轄奉行所などに保管される国絵図類や郷帳・検地帳などと描写
内容の比較検討を行い絵図上で評議された）。③論所見分伺書絵図 調査
結果を記述した見分帳とともに作製する絵図のことをいう。近世中期以降
必要な場合、論所地の測量を実施し、分間絵図を作製した。この絵図の表
現上の指示では、両者を図面上で色分したり、断り書きや付箋に書くなど
した（検使は国郡境であるときは番方や幕府代官などが派遣されており、
上方では二条城在番の大番と代官が対応している）。④詰絵図 検使より
管轄奉行へ伺書や論所見分伺書絵図が資料として提出された立会絵図とと
もに評議する際に、審議中という意味でこう呼ばれていた。⑤裁許（裏
書）絵図 図の裏面に裏書を記し、評定所の構成員などによる印が据えら
れた。国境と郡境は基本的に評定所一座の寺社・勘定・江戸町三奉行が連
印し、さらに老中も捺印するとされ、それ以外のケースは三奉行のみの連
印によるとした。

鳴海は北摂地域を対象に、山論絵図作製に関わる公事訴訟における裁判
機関の変遷を検討した結果、寛文期と享保期に画期がみられるとした。具
体的には①寛文8年以前 慶長17年の裁許絵図では自然地形や耕地などが
墨で線描され、境界線は黄色で引かれ、裏側に片桐且元の花押を据える。
②寛文8年以降 京都町奉行の関与した山論絵図はいずれも彩色図で、色

分凡例にしたがって彩色される。裁許絵図については図面の境界上に墨で線を引いてその線上加印し、裏書に裁許内容を記す定型化したものになっている。図幅寸法の大型化がある。③享保7年以降 上方八か国の「国分け」令以降、大坂町奉行の関与した山論絵図が多く占めるようになる。

次に既に分類した各絵図内容の特色を対象地域に照らし合わせてみると、この地域では証拠絵図と論所見分伺書絵図・詰絵図についてはその存在を確認できなかったという。立会絵図はもっとも数の多い形式の絵図であった。特にこの絵図を用いて裁許とした事例は延宝期から元禄期に集中している。すべてが彩色図で山地は緑、道は赤、水系は青とする場合が多く、近世絵図に共通した特徴をもつ。延宝期以降に作製された絵図は余白の色分凡例に従って彩色されるようになる。図面に地名や土地利用といった多くの文字情報が記される。

裁許絵図は公儀によって下された裁許内容を図面上に表し手交されたものである。特徴は裁判機関により下付された判決文を裏書として図の紙背に明記していること、決定した境界筋を図表の該当部分に墨線で明示し、その線上へ加印することの2点である。裁許絵図は複数の写を作製して争論に関わる村同志や村内部で所持され、裁許内容が共有し保存されていた。

最後に、山野論の調停時に作製された山論絵図の形式は、裁許絵図から立会絵図へと推移する流れが認められ、裁許絵図は18世紀中期を最後に作製されなくなった。また、江戸幕府役職が直接関係する山論絵図は、技術的に18世紀前期頃より測量を実施して作製されたというような測量技術面にも注目している。

また、山論絵図作製のための検地や測量技術についての研究では、近世における小地域の絵図作製において、廻り検地法は当時の測量技術として大きな役割を果たしていたことと、特に近世中期以降、土地利用が進展す

る状況に伴い、あらたに必要とされるようになった技術であったという。実施された測量や作図作業を村役人や在町絵師が担っていたことは、在地社会における地図測量技術の一般化を示唆している。測量作業を主導した争論当事者の村役人らは、遅くとも18世紀中期以降には地図測量に関する知識や技術を蓄積させていたといえる。在町絵師の役割は、時期的に遅れるものの、近世中期、おそらく享保期頃以降には技術的な問題を含みつつも体現可能な社会的状況にあったことを指摘している。ここでは裁許裏書絵図の作製技術や測量法、そうした技術の一般化について明らかにしている。

歴史地理学からの考察は裁許絵図そのものの検討に加えて、その技術面、測量技術についても考察が及んでいるのが現状のようである。

3 まとめ

縷々、裁許裏書絵図に関する研究状況を整理した結果、以下のようにまとめることができる。

- ① 歴史学・法制史分野では、当該絵図全体を展望した研究として、山本英二や杉本史子の研究がある。前者では当該絵図は、17世紀後半（1650－1710）、寛文・延宝～元禄期にかけて集中することと、それは幕府が積極的に検使を派遣して訴訟を処理した証であるとしている。後者では近世後期の裁許を整理した結果、地境論に際して裁許裏書絵図が作成されたことと、評定所発給方式の中に、裁許裏書絵図方式があることを指摘している。また、この地境論の解決法については、早くに小早川欣吾が、国郡村境論の特殊性や、論所における絵図の作成行為の特殊性、そして絵図の分類についての概説を述べている。

裁許裏書絵図そのものの詳細な研究の先駆的研究として、大国正美の研究では絵図や絵師について考察が行われている。4つに分類し、立会絵図以降は公図性を有することや、絵師の公平性や担保の要求は中世と

決定的に相違するという。

近年では宮原一郎が精力的に研究を推進している。宮原は近世前期の関東地域の争論絵図を研究し、立会絵図とその裁許絵図化への道、そして両者の差異は料紙や顔料の質の差異であるとしている。また、裁許絵図は、延宝～元禄にかけて増加したとする。制度的な幕府裁許の性格との関連では、評定所裁許の段階に入り、立会絵図の作法が完成し、寛文期以降、裁許過程を裁許状に記述していくという。

裁許絵図は入会地の確定との関連も指摘されている。船木明夫は、17世紀後半の村落間争論と裁許の特質について考察している。そこでは寛文期の裁許方針の定着化、つまり村落間の境界確定の観点からのみでなくて、境界を村落間入会地の範囲の確定の両面を示す方針に転換していることを述べている。さらに村は検地を根拠に権利を求め、それを幕府側も認める方向にあったという。栗原 亮の研究でも、貞享・元禄期には、村落間の訴訟には立会絵図の作成が命じられ、その裁許絵図は各村の入会地の所在を証明するものとなっていることを指摘している。いずれの研究でも入会地の確定に裁許絵図が寄与したことを明らかにしている。

- ② 歴史地理学分野では、早くに木村東一郎が村絵図の括りの中で、当該絵図に触れているが、鳴海国匡の研究をまっぴら本格的な研究が開始されたといってよい。鳴海は、江戸幕府の司法法典関係資料を参考にして、近世山論絵図を、証拠絵図、立会絵図、論所見分伺書絵図、詰絵図、裁許（裏書）絵図の5つに分類している。そして各絵図の表現上や記載内容の特質について述べている。

また、北摂地域の事例を検討し、この山論絵図の形式は、裁許絵図から立会絵図へと推移する傾向が見られ、裁許絵図は18世紀中頃を最後に作成されなくなることを明らかにしている。さらに地理学者ならではの考察方向として、こうした山論絵図作成のための検地（廻り検地）や測

量技術についても考察を広げ、絵図作成に廻り検地法が大きな役割を果たしていたことや、測量を担っていた層が在町絵師であったことから、地図測量技術の一般化・社会化を指摘している。

- ③ 最後に研究史の整理に基づいて、専修大学図書館蔵『石井良助文庫』における裁許絵図の位置づけをしておきたい。

調査番号1「羽鳥村田村山論裁許図」は、寛文8（1668）年のもので、貼紙の多さに特色が見られ、しかも絵図面上での評議という事実から、立会絵図の系統であるといえる。対立する村の村形を色分しており、裏書に関係者の捺印が付された裁許文が記されていることから、立会絵図の裁許裏書絵図化と考えてよいであろう。

調査番号2「信太郡野地争論裁許図」は貞享3（1686）年のものである。墨筋による裁許線とその線上に評定所役人の捺印がある。関係村落の村形の色分もなされており、開発地である畑らしき区画も野地内に描かれている。裏書からは御林内の開発違反という裁許結果が下されることになった。裁許裏書絵図である。

調査番号3「河内郡都賀郡野地争論裁許図」からは、「野元入会」と「村内野」という野地の分類の存在が知られる。また村別色分もなされている。図には墨筋の裁許線が引かれており、線上には評定所役人の捺印がある。裏書に依れば検使派遣による検分が行われ、その内容から水帳記載の畑の存在は、これを既成事実として認め、この事実を根拠にして村野の帰属が決定されている。また裁許絵図作成は村落間の入会地の範囲を確定する結果ともなっている。元禄12（1699）年、時あたかも元禄国絵図作成事業が進行している只中のことであった。

調査番号4「上総国武射郡住母家村賀茂村野地争論裁許図」はきわめて簡略な絵図となっている。裁許線は引かれているようだが、評定所役人による捺印は見られない。多数の境塚表現が特徴的といえる。宝永7（1710）年の裏書文によれば、検使を派遣し、問題の野地の地元は住母

家村にあるが、賀茂村の入会は認められている。裏書の裁許文が詳細になっているかわりに、絵図は簡略化の傾向になってきているとみてとれる。裁許文重視の形態といえよう。

調査番号7は「奥津村信太村絵図」である。調査番号2と同じ描写内容であるが、こちらの方がより新しい時期に作成されたように思われる。貼紙に「〇〇御林」とあり、墨筋の裁許線は調査番号2とは相違する。何の目的で何時作成されたかは不明である。

注記 本論文を作成するにあたり、専修大学文学部教授矢野建一先生ならびに、専修大学図書館関係者に、大変お世話になりました。心よりお礼申し上げます。また、所蔵史料の写真掲載を許可して下さいました専修大学図書館に対し、深謝致します。

〔注〕

- 1) 石井良助「裁許絵図」(国史大辞典編集委員会編『国史大辞典6』吉川弘文館, 1985), 142頁。
- 2) 山本英二「論所裁許の数量的考察」, 徳川林政史研究所研究紀要27, 1993, 159～191頁。
- 3) 杉本史子「『裁許』と近世社会—口頭・文字・絵図」(黒田日出男, エリザベス・ベリ, 杉本史子編『地図と絵図の政治文化史』東京大学出版会, 2001), 185～267頁。
- 4) 小早川欣吾『近世民事訴訟制度の研究』有斐閣, 1957, 696頁。
- 5) 大国正美「近世境界争論における絵図と絵師—地域社会の慣行秩序の展開にみる権力と民衆—」(『日本近世の史的構造—近世近代』思文閣出版, 1995), 53～96頁。
- 6) 宮原一郎「近世前期の争論絵図と裁許—関東地域における山論・野論を中心に—」徳川林政史研究所研究紀要37, 2003, 31～60頁。
宮原一郎「近世前期の幕府裁許と訴訟制度—関東地域における山論・野論を中心に—」徳川林政史研究所研究紀要38, 2004, 42～74頁。
- 7) 船木明夫「17世紀後半における入会地の存在形態と村落構造」, 関東近世史研究47, 1999, 3～30頁。
- 8) 栗原 亮「近世村落の成立と入会地紛争—常総南部の入会地紛争を中心として—」, 関東近世史研究57, 2004, 1～25頁。
- 9) 木村東一郎『近世村絵図研究』小宮山書店, 1962, 256頁。

木村東一郎『江戸時代の地図に関する研究』隣人社，1967，198頁．

木村東一郎『村図の歴史地理学』日本学術通信社，1978，181頁．

- 10) 鳴海国匡「近世山論絵図と廻り検地法」，人文地理51－6，1999，19～40頁．

鳴海国匡「『復元』された測量と近世山論絵図―北攝山地南麓地域を事例として―」，史林85－1，2002，35～76頁．

鳴海国匡「近世山論絵図の定義と分類試論―北攝山地南麓地域を事例として―」，歴史地理学44－3，2002，1～21頁．

鳴海国匡『近世日本の地図と測量 村と「廻り検地」』九州大学出版会，2007，193頁．